

## (18) ESD 教育部会

教育部会名	ESD
部会長名／作成者名	清野未恵子
概 要 (2 ページ)	
<p>(1) 組織・運営について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・部会構成、実施体制など</li></ul> <p>令和 3 年度は 22 名の教員体制で部会の運営を行った。総合コーディネータを中心に、授業担当者・ESD コース担当職員の協力のもと、リアルタイム型遠隔授業を実施した。ESD はすべての科目がアクティヴ・ラーニングを特徴としており、その要素を備えた双方向型の遠隔授業を実施した。ZOOM を用いたブレイクアウトセッションでは、対話を促進するツールを駆使してグループディスカッションを実施したため、遠隔授業の技術的サポートとして TA を配置した。</p> <p>(2) 実施状況について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・開講科目、カリキュラムなど</li></ul> <p>第 1 学年を対象とする科目は、「ESD 基礎」(第 2Q)、「ESD ボランティア論」(第 2Q)、「阪神淡路大震災と都市の安全」(第 2Q)、「ESD 論 A」(第 3Q)「ESD 論 B」(第 4Q)、「ESD 生涯学習論 A」(第 3Q)「ESD 生涯学習論 B」(第 4Q) である。</p> <p>第 2 学年対象科目は、「ESD 基礎 B」(第 1Q)「阪神淡路大震災 B」(第 1Q) である。このうち、「阪神淡路大震災と都市の安全」と「阪神淡路大震災 B」以外は、「神戸大学 ESD コース」の ESD 基礎科目群に指定されている。</p> <p>ESD 基礎科目では、カリキュラムのなかにフィールドワークによる持続可能な社会づくりへの接近の機会を設けており、コロナ感染拡大によりフィールドワークが困難であったが、第 4Q の 1 月末ごろまではフィールドワークを実施することができた。フィールドワークへの導入として、フィールドワークを重視する全学の環境・開発・人権・福祉関係の教員にミニレクチャーを担当していただいていた。</p> <p>学生個々の「現実を認識する力・視座・枠組み」を学生自身がみずから再検討することを、ESD の学びの第一歩とするカリキュラム構成になっている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・今年度の工夫・改善点</li></ul> <p>令和 3 年度は全ての科目をリアルタイム型遠隔授業の形式で行った。ほとんどの授業回で ZOOM のブレイクアウトルーム機能を用いて、学生同士のディスカッションの時間を設けた。学生らからの各回フィードバックから、ブレイクアウトルームにおいてディスカッションが促進されたかどうかなどを参考にした。それらをふまえ、学生たちにとって授業参加のモチベーションが上昇するよう、進行面や対話を促進するデジタルツールなどを用いた細かな工夫をおこなった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・現状と評価</li></ul> <p>第 2Q の「ESD 基礎」「ESD ボランティア論」、第 3・4Q の「ESD 論 A・B」「ESD 生涯学習論 A・B」、それぞれの科目で 200 名前後の履修生を得た。「ESD 演習」(第 2 学年以上、高度教養科目)の「国際人間科学」の R4 年度の履修者が 60 名を超え、この数は例年にない数であった。これは ESD 基礎科目を履修していた学生の母数の多さと、リアルタイム遠隔型の授業でもさらに学びを深めたいと考えた学生が一定程度存在した結果であると考えられ、所期の目的である「総合性の面白さと難しさ」についての理解を深められたとともに、工夫を凝らしたデジタルツールが功を奏したように思われる。多くの学生は他学部の学生との交流が充実していたと述べており、持続可能な社会づくりに求められる学際性・実践性を高めるモチベーションを獲得できたのではないかと</p>	

と思われる。それは、各授業における学生たちの反応や、リフレクションシートだけではなく、7. 8回目の授業で行われるリフレクション・ワークショップのなかで確認することができた。

### (3) 課題について

#### ・教育部会及び国際教養教育院における今後の課題

1つ目に、コロナ禍においてリアルタイム遠隔授業でもアクティヴ・ラーニングは実現可能であるが、フィールドワークとの連動ができないことが、現実社会とESDとの接合への理解不足につながる可能性がある。

2つ目に、履修者の環境によってブレイクアウトルームにおけるディスカッションに参加できない学生が一定程度存在した。昨年度同様、アクティヴ・ラーニング型の授業を望む者とそうでない者、また、ESDコースの修了認定を目指す学生とそうでない学生との間のギャップを埋める授業展開が課題である。

3つ目に、これまでと同様に、他の部会の授業もESDに関連しているものがある。それらと連動した新しい教育領域としての発展を望みたい。

最後に、ESD教育部会も人数が増えてきたため、教員間の相互理解・交流を深める企画、たとえば、公開講座の共同実施なども考えている。学内のESDステークホルダー（教員・学生・民間事業者・行政職員など）との交流を深めるための授業外での活動を整備する必要もある。また、高度教養科目であるESD演習や部局単位で開講されているESD関連科目との連動性も高める必要があり、本部会の担当教員と、神戸大学ESDコースの授業担当者とのネットワークも今後充実させる必要がある。

### (4) 総合所見

#### ・全体としてのまとめ

昨年度から施行してきたリアルタイム型遠隔授業におけるアクティヴ・ラーニングの実施は、ブレイクアウトルームに入る前の丁寧なイントロダクションや、ビデオをオンにできない学生同士で部屋を分けて異なるファシリテーションを行う、またブレイクアウトルームで用いるデジタルツールや適切な作業の指示など、細かな配慮を徹底することで、グループディスカッションが充実したものになっていた。

一方で、ESD関連の学習プログラムの根幹となっているフィールドワーク（体験）と理論の往還が困難な状況において、ESDの知識のみが深まっていくことが懸念された。コロナ禍においてもアクティヴ・ラーニングの授業を運営すること、また、知識を行動につなげうるコロナ禍のフィールドワークの可能性を探ることが、昨年度に引き続き、今後の目標である。

令和4年度は、そうした目標を意識しつつ、対面を中心とした授業に戻るが、感染拡大予防のため、履修可能人数を制限するほか、フィールドワークも最低限とする。「ESD基礎」では学内におけるフィールドワークを実施することで、知識と行動との連動を促す。「ESDボランティア論」では、夏休みに向けた行動目標設計をゴールとし、ボランティアに向かう構え・態度を醸成する。グループワークを交えながら、ESD実践に求められる協働（コラボレーション）の意味理解を進める予定である。

SDGsを達成する手法として着目され始めているESDは、多様な専門が出入りするプラットフォームとして機能することも期待されている。学生だけではなく、全学の教員がESDに関与することを通して、持続可能な開発をめぐる学問の在り方を考慮する可能性が高まることも期待される。ESD教育部会の参加教員を増員するとともに、ESDやSDGsに関連する授業の増設に努めたい。

## **A 組織構成と運営体制について**

①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（100字程度）

神戸大学 ESD コースの専門委員を中心とした授業担当者組織となっており、持続可能な開発に関連した教員によって運営されている。また、総合コーディネータの取りまとめを中心に、国連大学認定組織である「RCE 兵庫－神戸 (ESD 推進ネットひょうご神戸)」の協力のもと、多様な実践現場に接続することも可能となっている。

根拠資料

教育部会構成員名簿、シラバス、神戸大学 ESD コース HP、RCE 兵庫－神戸 HP

## **B 内部質保証について**

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか (100 字程度)

すべての授業においてリフレクションシートの記入を求めている。また、第 2 Q の最後に提出する総合レポートや授業振り返りアンケート結果を踏まえて、第 3、4 Q の授業の方法・内容を修正している。また、履修学生は多いが、複数の教員や TA が手分けをして学生とコミュニケーションを図り、学びの質を点検している。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果、各回のリフレクションシート

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか (150 字程度)

授業のねらいの達成度を確認したり、問題点を改善したり、授業内容の微修正を行ったりにするために、随時、総合コーディネータ、TA、授業担当者間で「授業準備ミーティング」を実施している。期間中、週 4 時間、年間 60 時間かけて、ESD を実質化するための協議を行っている。フィールドワーク協力組織との間でも、コロナ感染拡大を防ぎつつフィールドワークが実施できるよう、協議を進めている。

根拠資料

一回一回の授業実施計画書、ESD 推進ネットひょうご神戸運営委員会議事録

- ③授業の内容及び方法の改善を図るための F D を組織的に実施しているか (100 字程度)

②に記したように、関係スタッフの間で、授業前後のミーティングを実施しているほか、関係教員が互いの授業を参観するピアレビューも実施している。また、スタッフは、ESD 推進ネットひょうご神戸と神戸大学 HC センターの主催する「ESD 実践研究集会」に参加し、ESD 実践者の育成の方法を常に検討している。

根拠資料

『ESD 実践研究 2020』(神戸大学 HC センター)

- ④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるときともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか (100 字程度)

大人数の授業では、TA・SA のほか、ESD 基礎科目担当教員が協力してワークショップなどを実施している。ワークショップにおけるファシリテーションスキル研修など、専門の教員が授業以外のさまざまなプロジェクトで指導している。また、彼らはアクションリサーチの補助を通して実務のスキルを磨いている。

根拠資料

TA・SA 報告書、『ESD 実践研究 2020』

## **C 教育課程と学習成果について**

- ①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものであるか (100 字程度)

本部会の授業目標は、持続可能な開発という理想の実現に向けて、あらゆる人が主体となることができる教育的アプローチの意味を理解し、その実質化を図る力量を高めることにある。神戸大学モデルとされるグローバル社会において活躍し得る人材育成の中核を担うものとなっている。

根拠資料  
シラバス

- ②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100字程度）

主たる授業担当者が授業開講の前年度末に一堂に会し、目標に関するミーティングを行っている。本部会のねらいやESD概念について共通理解を図るとともに、具体的なシラバスを協働で作成している。授業間のつながりを担当者が意識するものとなっている。

根拠資料  
シラバス、担当者会議議事記録など

- ③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100字程度）

すべての授業科目において、ESDを前提とする目標がたてられているとともに、各授業の固有の特徴が明示されている。とりわけ、クォーターの異なる授業間のつながりは授業担当者間で事前に協議され、学びの流れが作られている。

根拠資料  
シラバス

- ④単位の実質化への配慮がなされているか（100字程度）

簡単に単位が取れるというものではない。どの授業も毎回のリフレクションシートの記入と、フィールドワークに参加した場合には感想レポートが科せられる。また、最後には、講義と体験およびワークショップで得た知見をもとに、高度な論理展開力の程度が評価される。単位の形骸化はありえない。

根拠資料  
シラバス、リフレクションシート、最終レポート

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150字程度）

本部会の授業は、いずれも、講義・ワークショップ（グループディスカッション）を重ね合わせたものとなっている。持続可能な開発という理念を、資料分析・ヒアリング・体験・討議を通して理解し、その経験の下にESD実践を構想する力量を高めることとなっている。教員と学生の対話、学生同士の熟議を促進するワークショップのツールがふんだんに用いられている。

根拠資料  
シラバス、一回一回の授業実施計画書

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50字程度）

すべての授業において、上記事項については、ほとんど記載がなされている。しかし、「教科書又は参考図書」については、「授業中に指示されるもの」とされている。これは、授業が学生との対話のなかで展開する性質を反映したものである。

根拠資料  
シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100字程度）

授業担当者または総合コーディネータの連絡先は公開しており、電話やメールで随時連絡の取れる体制にある。また、授業後に時間を取り、履修の方法について、相談できるようにしている。学務部の職員も、個別に履修相談にのってくれており、学生の履修におけるニーズに応えられる体制にある。

根拠資料  
シラバス、「神戸大学 ESD コース」HP

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100字程度）

授業担当者または総合コーディネータの連絡先は公開しており、電話やメールで随時連絡の取れる体制にある。また、学生と授業後の感想についてフランクに話ができるように配慮もしている。基本的に、授業中に自由に発言できる雰囲気を作り上げ、学生のニーズに応えるにしている。

根拠資料  
シラバス

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100字程度）

成績評価基準及び成績評価方針は、シラバスに明記している。また、BEEF を使ってレポートの整理をしている。すべての授業が複数の教員によって運営されており、成績評価は、その合議によって、数値化されたデータを元に行っている。

根拠資料  
シラバス、成績分布（国際教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100字程度）

ESD の推進に必要な学修成果は、本学の ESD コース関連授業全体との関係のなかで評価されるべきであるが、多くの学生が、ESD の必要性和課題、現場での取組みの実態、ESD 実践の枠組みなどを、ESD 実践の基礎として理解していると判断している。

根拠資料  
最終レポート、成績評価、授業振り返りアンケート結果